

[試験紹介]

育苗期間中の温度がいちごの花芽分化に及ぼす影響

いちごの花芽分化は、育苗期間中の温度に大きく左右されます。特に近年では、夏季の高温によって花芽分化が遅れ、それに伴い定植が遅れることにより、年内収量が減少する事例が増加しています。

本県では、早生で収量性に優れた「とちあいか」の普及が進み、令和7年産では栽培面積の81%を占めるまでに拡大しています。しかし、「とちあいか」においても猛暑の年には花芽分化が遅れる傾向が見られるため、より高い耐暑性を備えた品種の育成が求められています。

本試験では、育苗期間中に40℃の高温環境を設定し、高温下でも安定して花芽分化が可能な系統の探索を行っています。

今後は、耐暑性系統を探索するとともに、それらを交配母本として活用し、新品種の開発につなげていきます。



写真1 育苗の様子

(いちご研究所)

[試験紹介]

イチゴ萎黄病の耐病性育種素材の探索

イチゴ萎黄病は、土壌伝染性の難防除病害です。当センターでは、耐病性を有する品種「アスカウェイブ」を活用した育種を進めてきました。しかし近年、この耐病性を打破する萎黄病菌株が確認されたため、新たな耐病性育種素材を探索しています。

耐病性打破菌株を用いた接種試験の結果、育種素材として有望と考えられる品種が3つ見つかりました。ただし、耐病性が確認されたものの軽度で発症するケースや、発病程度に年次間差が認められるケースもありました。要因として、夏季の高温や土壌中の菌密度の影響が考えられ、近年は夏季の高温傾向が顕著であることから、これらの環境要因が耐病性に与える影響を把握する必要があります。

そこで、本試験では、当センターが所有する複数の菌株を用いた接種を行い、気温や菌密度を高く設定した条件下で、いずれの菌株を接種した場合でも発病が少ない品種を選定し、耐病性育種素材として評価していきます。



写真1 異なる品種における接種菌株ごとの発病状況

(※2024年度の試験結果。品種と菌株の組合せにより発病程度に差が認められ、品種Aが有望であった。)

(病理昆虫研究室)